

中1ギャップの構造と規定因

－学級適応感との関連から－

The Structure and Determinants of Students' Maladjustment in Transition to Junior High School

日 高 樹 奈* 谷 口 明 子
Juna HIDAKA Akiko TANIGUCHI

1. 問題と目的

平成 22 年 8 月発表の「平成 21 年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」（小中不登校）の速報値によれば、不登校児童生徒数は 122,432 人となっている（文部科学省，2010）。前年度より約 4,500 人減少（約 3.4%減）し、平成 13 年度のピーク時に比べれば落ち着きを見せているとは言え、依然として問題が深刻であることには変わらない。

下の平成 21 年度の不登校児童生徒数を学年別に表わしたグラフ（Figure 1）に示される通り、小学校 6 年生の不登校児童数は 7,540 人だが、中学校 1 年生の不登校生徒数は 22,384 人と、約 3 倍に跳ね上がっている。このような小学校から中学校への環境移行時に学校不適応が深刻化する現象と関連して、「中 1 ギャップ」が取り上げられることが多くなった。

「中 1 ギャップ」という言葉をタイトルに含む文献が国立情報学研究所 CINII 上に初めて登場したのは、2006 年 11 月、ごく最近のことである。教員向け雑誌『教職研修』において「不登校問題にどう取り組むか ― 個に応じた多様な対応と “中 1 ギャップ” の解消」と題する特集が組まれ、実践例 2 本を含む 4 本の論文が掲載されている。続く 2007 年には、ベネッセコーポレーションの雑誌『VIEW21（中学版）』に「中 1 ギャップで学習の悩みが増加」と題された見出しが登場し（石川晋・石川拓・高橋，2009）、以降、「中 1 ギャップ」という言葉は急速に定着した（児島・佐野，2006）。しかし、「中 1 ギャップ」の定義は一様ではなく、中学 1 年生でいじめや不登校が急増するという現象面のギャップと、中学に進学した子どもたちが感じる小・中学校間のギャップという 2 重の意味で用いられている（北海道教

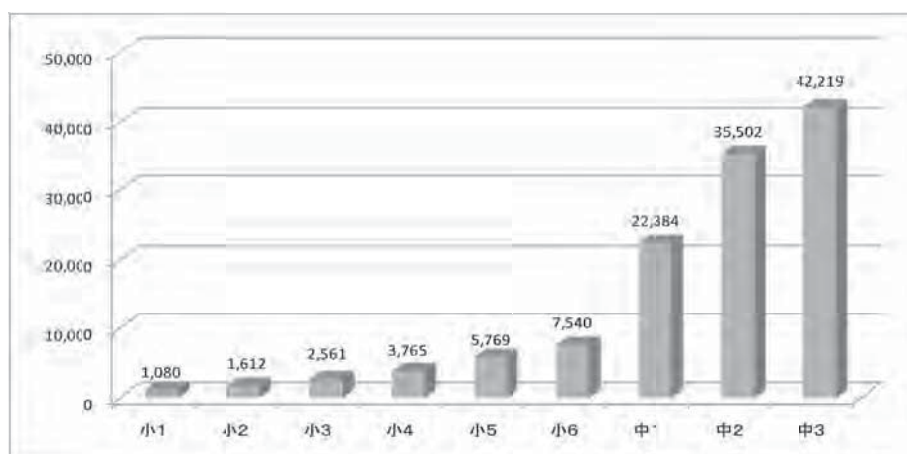


Figure 1 学年別の不登校児童生徒数（文部科学省，2010）

*山梨大学大学院教育学研究科修士課程

育庁, 2010)。本研究においては、後者に倣い、「中1ギャップ」を小学校との差異として子どもたちが感じる中学校生活への戸惑い・困難感として論を進める。

「中1ギャップ」の背景要因としては、学習内容の高度化や学級担任制から教科担任制への移行、部活動がはじまることによる生活リズムの変化・心身ともに著しく成長する子ども自身の発達上のとまどい等の学習面及び生活面の変化や(野澤, 2009)、教師の指導観と生徒に対する関わり方の変化が指摘されている(毛利, 2009)。また、こうした環境上の差異が問題となる背景には、小学校と中学校の段差の大きさそのものというよりも、段差を乗り越えていく「たくましさ」や、違う学校から集まってきた子どもと友達になるための社会的スキルが子どもの側に欠けていることもあげられる(毛利, 2009; 野澤, 2009)。「中1ギャップ」の背景には、環境変化の大きさと子どもの育ちの二つの側面があるとまとめられるだろう。

「中1ギャップ」に関しては、近年盛んに研究が試みられている。小学校と中学校の教師の視点から「中1ギャップ」の様相とその要因について検討した富家・宮前(2009)の研究、小学6年生と中学1年生の生活時間の実態と意識からの分析を試みた野澤(2008)の研究等がある。しかし、生徒自身の立場から小学校から中学校への環境移行がどのように経験され、それが学校不適応とどのような関連があるのかを検討した研究はきわめて少ないというのが現状である。そこで、本研究では、小学校から中学校へという大きな発達上・生活上の移行において、中学1年生がどのようなことを「ギャップ」と感じるのか、その「ギャップ」の構造を明らかにし、さらに「ギャップ」が学校不適応とどのように関連するのか検討することを目的とする。具体的には下記4つの仮説について検討する。

- 仮説1：男子よりも女子のほうが「中1ギャップ」は大きいだろう。
- 仮説2：部活をしている生徒のほうが、「中1ギャップ」は低く、学校への適応は良好だろう。
- 仮説3：運動部所属生徒のほうが、文化部所属生徒より、学校への適応感も高いだろう。
- 仮説4：友人づくりに困難を感じる生徒はそうでない生徒より学校適応感が低いだろう。

2. 方 法

(1) 調査時期・調査協力者

2010年6月下旬、九州地方の公立中学校2校の計6クラスの中学1年生145名(男子69名、女子76名)より質問紙調査への協力を得た。分析は、欠損値のある33名を除いた112名分のデータに対して行った。

(2) 調査内容

①「中1ギャップ」尺度(31項目)：「中1ギャップ」の様相を明らかにするために、独自尺度を作成した。予備調査として公立中学校1年生3名(男子1名、女子2名)を対象とした30分～45分の半構造化面接を行い、「中学生になって感じた戸惑い」「小学校との相違点」について情報収集を行った。収集された情報をもとに、31の質問項目を作成し、「5. かなりそう思う」から「1. 全くそう思わない」まで5件法で回答を求めた。

②学校への適応感尺度(30項目)：学級適応感を測定することを目的として、大久保(2005)が作成した30項目から成る尺度を用いた。本尺度は、個人－環境の適合性の視点から適応状態を測定するものであり、「居心地の良さの感覚」「課題・目的的存在」「被信頼・受容感」「劣等感の無さ」の4因子から構成されている。「あなたの気持ちに一番近いものはどれですか」の教示のもと、「5. よくあてはまる」から「1. まったくあてはまらない」まで5件法で回答を求めた。

③学校生活享受感情測定尺度(10項目)：学校に行くことの楽しさの測定を目的とする古市(2004)の尺度を採用した。本尺度は「学校は楽しくて1日があっという間に過ぎてしまう」「学校にいるときが一番楽しい」等の項目から成り、5件法で回答を求めるものである。

④フェイスシート項目：性別・部活への参加の有無、及び部活動名を尋ねた。

(3) 実施手続き

配布・回収は1校では第一著者が行い、もう1校では学級担任が行った。所要時間は15分～20分で、調査は授業時間を使い、集団的に実施された。分析にはSPSS Ver.17.0を用いた。

3. 結果と考察

(1) 「中1ギャップ」の様相～記述統計の結果から

「中1ギャップ」全31項目のうち、平均値が高かった上位5項目は、「小学校の時に比べてテスト勉強が大変だと感じる」($M=4.41$)、「テストの内容が小学校の時に比べて難しいと思う」($M=4.26$)、「授業の内容が小学校より難しくなったと感じる」($M=4.09$)、「小学校の時に比べて体が疲れやすくなったと感じる」($M=3.98$)、「小学校の時に比べて部活と勉強の両立が大変だ」($M=3.91$)であった。調査時期が6月下旬とちょうど初めての中間テスト後であることの影響も考えられるが、中学1年生の多くが、学習面にギャップ感をもち、疲労を感じていることが明らかになった。

(2) 「中1ギャップ」の構造～子どもたちにとって何が「ギャップ」なのか

「中1ギャップ」尺度31項目について、主成分分析法・プロマックス回転による因子分析を行い、固有値の減衰状況と解釈可能性から、5因子を抽出した。1つの因子にのみ因子負荷が0.4以上あることを基準に項目を精練した結果、17項目を得た（Table 1）。5因子による説明率は56.6%である。

第1因子は、「小学校の頃とは違い、中学校ではテストがまとまってあるので大変だと感じる」「授業のスピードが小学校の時に比べて速いと感じる」「授業の内容が小学校よりも難しくなったと感じる」等の5項目から構成される。いずれも学習面での小中の相違点への戸惑いや困難を示していることから、第1因子を『勉強・学習に対するつまずき』と命名した。第2因子は、「小学校の時に比べて先輩の存在が怖いと感じるようになった」「小学校の時に比べて、先輩とのつきあい方が分からない」「上の学年の人に敬語で話さなければいけないことに戸惑いを感じる」等の5項目から構成され、部活動等における「先輩－後輩関係」という、中学校から新たにでてくる人間関係のタイプが負担となっている内容である。特に「怖い」という項目の因子負荷が高いことから、第2因子を『先輩への恐怖心』と命名した。第3因子は、教師との関係・クラスの男女の人間関係の質の変化を表わす項目から成っており、『人間関係への戸惑い』と命名した。第4因子は、「眠くなる」「時間が長く感じられる」といった学校生活において疲れや退屈が感じられる状態を表わす項目から構成されており、『学校生活倦怠感』と命名した。第5因子は『新しい友人関係の獲得困難』と名付けた。第5因子は、2項目と項目数も少なく、内容的にも新しい友だちづくりと新生活への順応感と意味が異なる項目から構成されているが、友だちづくりが「新生活になれた」という感覚とダイレクトにつながっているという知見を重視し、1つの因子として抽出することとした。

各因子の α 係数は、0.531～0.719と必ずしも十分な内的一貫性が確保されていない。しかし、新しい分野における探索的研究という本研究の位置づけと、「中1ギャップ」尺度全17項目の α 係数は0.788と十分な信頼性が確保されていることを勘案し、尺度項目の更なる精練を課題として残しつつ、本研究においてはこのまま分析・考察を続けることとする。

因子分析の結果から、「中1ギャップ」が「勉強・学習に対するつまずき」「先輩への恐怖心」「学校生活倦怠感」「人間関係への戸惑い」「新しい友人関係の獲得困難」の5つの下位構造を有することが明らかになった。石川ら（2009）は、「中1ギャップ」が「1. 学習に関わること、2. 発達段階に関わること、3. 生活習慣や生活リズムに関わること、4. 仲間づくりに関わること」に大別され、ギャッ

Table 1. 「中1ギャップ」尺度の因子分析結果

<項目>		I	II	III	IV	V
I 勉強・学習に対するつまずき($\alpha=0.719$)						
質問19	小学校の頃とは違い、中学校ではテストがまとまっているので大変だと感じる	.741	-.027	.009	.118	-.206
質問3	小学校の時に比べて、中学校ではテストの結果が順位として出てしまうのでイヤだ	.712	-.099	-.127	-.057	.154
質問22	授業のスピードが小学校の時に比べて速いと感じる	.637	.074	-.022	-.125	-.233
質問29	授業の内容が小学校よりも難しくなったと感じる	.575	.076	.164	.180	-.185
質問25	小学校の時に比べて勉強のやり方がわからない	.427	.233	-.069	.258	.133
II 先輩に対する恐怖心($\alpha=0.695$)						
質問30	小学校の時に比べて先輩の存在が怖いと感じるようになった	-.007	.870	-.066	.137	-.188
質問2	小学校の時に比べて、先輩とのつきあい方が分からない	-.074	.803	-.135	-.144	-.043
質問7	上の学年の人に敬語で話さなければいけないことに戸惑いを感じる	-.003	.652	.104	.213	.110
III 人間関係への戸惑い($\alpha=0.594$)						
質問5	中学校の先生は小学校の先生に比べて接し方が厳しいと感じる	.130	-.201	.887	-.168	-.151
質問8	小学校の時に比べて中学校の先生とコミュニケーションがとりにくいと感じる	-.209	.348	.621	-.018	-.049
質問26	小学校の時に比べると男女関係の問題が多くなり戸惑いを感じる	.294	-.158	.544	-.025	.184
質問23	小学校の時に比べて担任の先生と接する機会が少なくなったと感じる	-.271	-.012	.538	.297	.023
IV 学校生活倦怠感($\alpha=0.604$)						
質問6	小学校の頃に比べて授業中眠くなる	-.163	-.009	.155	.788	.031
質問27	小学校の時に比べて授業の時間が長く感じる	.345	-.186	-.093	.738	-.237
質問4	小学校の時に比べて、学校で過ごす時間が長くなったと感じる	-.081	.198	-.195	.570	.153
V 新しい友人関係の獲得困難($\alpha=0.531$)						
質問20	中学校の生活にはだいぶなれたと思う	-.059	.031	.149	.113	-.810
質問9	今、新しい友達をつくることを大変だと感じる	.030	-.129	.110	.123	.785
因子間相関		I	II	III	IV	V
I		1	.44**	.37**	.40**	.17
II			1	.30**	.32**	.17
III				1	.29**	.10
IV					1	.19*
V						1

プが学校教育全般に広がっていることを指摘している。本研究で使用了「中1ギャップ」尺度には、身体的変化をはじめとする子ども自身の発達的变化へのギャップ感に関する質問項目が含まれていなかったこともあり、結果としては示されなかった。また、「3. 生活習慣や生活リズムに関わること」は、本研究では「眠い」「授業時間が長く感じられる」等の何となく意欲が低迷している状態を表わす「倦怠感」因子として抽出されている。予備調査として行った中学校1年生対象の半構造化面接においては、「学校にいる時間が長くなった」「学校の規則が厳しい」等の生活習慣・生活リズムの変化が小学校との相違点として語られ、質問項目として尋ねたが、項目分析の結果、尺度項目としては残らなかった。個人差を反映する項目としては適切ではないが、子どもたちの多くが感じるギャップであると考えてよいだろう。

(3) 「中1ギャップ」に関する性差・部活動参加との関連

「中1ギャップ」全体および因子ごとにt検定による性差の検討を行った (Table 2)。その結果、女子のほうが男子より「勉強・学習に対するつまずき」($t=2.21$, $p<.05$, 女子>男子)を感じ、全般的な「中1ギャップ」($t=1.66$, $p<.10$, 女子>男子)についてもより強く感じている傾向が示された。また、統計的には有意ではなかったが、その他の「中1ギャップ」因子についても、新しい友人関係づくりの困難さを除けば、いずれも女子のほうがより強くギャップを感じていることが明らかになり、仮説1「男子よりも女子のほうが中1ギャップは大きいだろう」はほぼ支持されたと言えるだろう。しかし、「学校生活享受感」を見てみると、男子より女子のほうが「学校を楽しい」と感じていることが示

Table 2. 「中1ギャップ」に関する性差・部活動参加との関連

	n	性 差			部活の有無			部活種		
		男子 40	女子 53	t 値	あり 102	なし 10	t 値	運動系 78	文化系 24	t 値
先輩	M (SD)	12.89 (3.83)	13.52 (3.69)	-0.89	13.26 (3.79)	12.75 (5.12)	0.26	13.46 (3.77)	12.63 (3.87)	0.93
勉強・学習つまずき		13.93 (3.52)	15.47 (3.63)	-2.21 *	14.73 (3.67)	11.50 (4.44)	1.71 †	14.40 (3.58)	15.79 (3.83)	-1.64
得意感		10.59 (3.27)	11.17 (2.74)	-1.02	10.92 (2.92)	8.00 (4.40)	1.93 †	10.92 (3.02)	10.93 (2.65)	0.09
人間関係		8.13 (2.47)	8.79 (3.06)	-1.26	8.46 (2.88)	8.25 (3.06)	0.15	8.24 (2.73)	9.17 (3.28)	-1.38
友人関係		4.76 (2.07)	4.35 (2.05)	0.53	4.55 (2.04)	6.00 (2.16)	-1.39 †	4.40 (1.91)	5.04 (2.40)	-1.36
中1ギャップ全		50.30 (9.43)	53.50 (10.83)	-1.66 †	51.92 (10.28)	46.50 (13.92)	1.03	51.42 (10.23)	53.54 (10.48)	-0.88
居心地の良さ		37.29 (7.88)	37.21 8.97	0.05	38.03 (7.80)	29.90 (10.70)	3.02 **	39.36 (6.81)	33.68 (9.32)	2.65 **
課題・目的の存在		25.94 (5.13)	25.26 (4.95)	0.67	26.09 (4.69)	20.44 (5.66)	3.38 **	26.30 (4.62)	25.41 (4.98)	0.78
被信頼・受容感		15.12 (4.78)	15.66 (3.92)	-0.62	15.80 (4.20)	11.70 (4.08)	2.94 **	16.15 (4.17)	14.77 (4.21)	0.15
劣等感の無さ		14.75 (4.20)	14.27 (3.34)	0.65	14.23 (3.64)	17.44 (4.16)	-2.60 **	14.26 (3.71)	14.17 (3.50)	0.11
学校適応感全		97.00 (17.32)	97.67 (17.47)	-0.18	99.43 (15.03)	76.50 (25.03)	2.55 *	101.11 (13.85)	93.61 (17.74)	1.90 †
学校生活享受感		29.29 (10.85)	33.20 (9.19)	-2.01 *	32.06 (9.83)	24.30 (11.14)	2.35 *	32.32 (9.33)	31.23 (11.49)	0.47

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

され ($t = 2.01$, $p < .05$, 女子 > 男子)、学習を中心としてギャップ感は感じながらも、学校生活は男子よりも楽しんでいるという女子中学生の姿が窺われた。

次に、部活動への参加の影響を検討するために、部活動の有無に関して各尺度得点の t 検定を行った (Table 2)。結果として、部活動をしている生徒の方が、「勉強・学習に対するつまずき」($t = 1.71$, $p < .10$, 部活有 > 無)、「学校生活倦怠感」($t = 1.93$, $p < .10$, 部活有 > 無)については、より深刻なギャップを感じている傾向が示された。しかし、部活動をしている生徒のほうが、新しい友人づくりの困難は少ない傾向があり ($t = 1.759$, $p < .10$, 部活無 > 有)、学校での学校適応感や学校生活を楽しむと思う気持ちは有意に高く、より適応的な学校生活を送れていることが示された。部活動に参加することで、友人もでき楽しいのだが、勉強との両立が難しく、同時に慢性的疲労が深刻であることが明らかになった。以上より、仮説2「部活をしている生徒のほうが、していない生徒より『中1ギャップ』は低く、学校への適応は良好だろう」は、「中1ギャップ」に関しては部分的にのみ支持され、学校への適応に関しては支持されたとと言えるだろう。しかし、本研究においては部活動をしている生徒が102名に対し、していない生徒が10名と人数差が大きく必ずしも安定した検定結果とは言えないことが予測される。あくまでも探索的な傾向としての理解にとどめることが適切だろう。

さらに、運動系と文化系の部活種を比較してみると、「中1ギャップ」得点には有意な差はみられないが、「居心地の良さの感覚」($t = 2.65, p < .01$, 運動系>文化系)に有意な差がみられ、「学校適応感」全体($t = 1.90, p < .10$, 運動系>文化系)において差が有る傾向が見られた。いずれも運動部所属生徒のほうが高い適応感を示しており、仮説3「運動部所属生徒のほうが、文化部所属生徒より、学校への適応感も高いだろう。」は支持された。しかし、統計的には有意ではないものの、「先輩に対する恐怖」得点の平均値は運動部所属生徒のほうが文化部所属生徒よりも高く、先輩という新しい人間関係については、運動部所属生徒のほうがより難しいと感じていることが示唆されている。

(4) 「中1ギャップ」と学校適応感の関連

「中1ギャップ」と学校適応感の関連を検討する為に、「中1ギャップ」全体および因子ごとに、得点の高い群(上位25%)と低い群(下位25%)に適応感の差があるかどうかを検討した(Table 3)。結果として、「先輩への恐怖心」や「勉強・学習に対するつまずき」が高い生徒のほうが低い生徒よりも劣等感を強く抱いていることが示された。また、「新しい友人関係の獲得困難」を強く感じている生徒は、「学校適応感」全体及び、「居心地の良さの感覚」「課題・目的の存在」「被信頼・受容感」「劣等感の無さ」の各因子、さらに、「学校生活享受感」においても有意に低い値を示していることが明らかになった。

新しい友人づくりについてダイレクトに尋ねた項目「9:新しい友達をつくることを大変だと感じる」と、「学校適応感」との相関係数を算出したところ、「被信頼・受容感」($r = -.19, n.s.$)を除いた「居心地の良さの感覚」($r = -.54, p < .01$)、「課題・目的の存在」($r = -.40, p < .01$)、「劣等感の無さ」($r = -.25, p < .01$)、「学校適応感全体」($r = -.49, p < .01$)、「学校生活享受感」($r = -.42, p < .01$)と、高い負の相関を示していたことから、新しい友達づくりと適応感是非常に密接な関連があることが示唆された。生活の中で友人関係がもつ重要性が増す発達段階にある生徒にとって、6月時点で新しい環境において友達がうまく作れたかどうか、学校生活への適応において非常に大きな要素となっていると言えるであろう。以上より、仮説4「友人づくりに困難を感じる生徒はそうでない生徒より学校適応感が低いだろう」は強く支持されたと言える。

4. まとめ～教育実践への示唆と今後の課題

本研究においては、「中1ギャップ」の構造と規定因を探索的に検討し、学校適応感との関連について考察した。結果として、次の3つの知見を得ることができた。第一に、多くの中学生が6月下旬時点

Table 3. 「中1ギャップ」と学校適応感との関連

	居心地			課題・目的			被信頼・受容感			劣等感の無さ			学校適応感			学校生活享受感		
	高群 25	低群 25		高群 25	低群 25		高群 25	低群 25		高群 25	低群 25		高群 25	低群 25		高群 25	低群 25	
n	n	n		n	n		n	n		n	n		n	n		n	n	
先輩	34.79 (9.16)	36.97 (10.07)	0.82	24.52 (5.19)	26.10 (6.01)	1.00	16.50 (5.54)	15.06 (4.67)	-1.02	16.35 (4.74)	19.13 (5.66)	1.90†	94.16 (15.39)	97.14 (24.38)	0.47	29.29 (10.86)	31.38 (12.18)	0.65
勉強・学習	35.92 (10.68)	37.46 (8.30)	0.57	25.20 (5.31)	25.50 (5.85)	0.19	15.58 (5.60)	15.58 (4.75)	0.00	17.48 (5.09)	20.81 (5.15)	2.39*	94.76 (20.97)	100.95 (20.20)	0.97	30.82 (12.52)	30.80 (10.63)	-0.07
居心地	37.71 (9.09)	37.17 (7.05)	-0.22	24.53 (6.26)	25.91 (5.48)	0.75	14.59 (5.33)	15.00 (4.44)	0.26	17.82 (5.11)	19.70 (4.84)	1.27	95.25 (18.80)	98.62 (17.60)	0.56	29.86 (11.00)	29.55 (9.88)	-0.10
人間関係	35.79 (9.66)	38.62 (11.04)	1.01	24.85 (5.25)	26.00 (5.79)	0.75	14.74 (4.80)	15.11 (4.64)	0.23	18.07 (4.81)	19.36 (5.34)	0.85	93.48 (17.65)	98.29 (24.33)	0.77	30.44 (9.88)	30.70 (12.58)	0.84
友人関係	31.39 (9.30)	42.73 (6.00)	5.68**	23.50 (4.99)	27.87 (4.80)	3.46**	13.87 (4.87)	16.90 (4.20)	2.56*	17.39 (5.10)	20.69 (4.43)	2.78**	85.26 (19.87)	108.59 (13.24)	4.95**	26.09 (10.53)	35.13 (7.67)	3.98**
中1ギャップ 全	35.22 (9.75)	40.04 (8.38)	1.90†	24.19 (4.98)	27.08 (5.14)	1.95†	15.11 (5.46)	15.50 (4.32)	0.28	16.73 (4.05)	20.66 (4.73)	3.12**	91.88 (15.82)	103.68 (19.19)	2.05**	28.92 (11.45)	33.74 (10.88)	1.54

†=p<.10, *=p<.05, **=p<.01

で勉強やテストへの困難感を有し、疲労感を感じていること、そして「中1ギャップ」が「勉強・学習に対するつまずき」「先輩に対する恐怖心」「人間関係への戸惑い」「学校生活倦怠感」「新しい友人関係の獲得困難」の5つの下位構造を有することが明示された。勉強への困難感以外にも、“先輩－後輩関係”という新たに登場する人間関係や、先生との関係や異性の同輩との関係の変化への適応に個人差がみられることが明らかになった。第二には、「中1ギャップ」が男子よりも女子のほうが深刻であること、部活動に参加している生徒よりしていない生徒の方が学校適応感が低いこと、さらに運動部所属の生徒のほうが文化部所属生徒よりも学校適応感が高いことが明らかになり、性差や部活動の参加状況が「中1ギャップ」の規定因と考えられることが示唆された。第三に、6月の時点で、新しい友達の獲得がうまくいったかどうか、学校適応感と密接に関係していることも浮上した。

本研究から実践への示唆として、教育活動にあたっては中学1年生初期は「疲れている」ことを前提にする必要性が確認されたことがある。「もう中学生だから」といきなり負担の大きな課題を出すのではなく、生徒の心身の疲労状況をよく観察して課題を出していくという配慮が大切になる。そして、何よりも、友人づくり支援の重要性である。学校行事を活用したり、構成的グループエンカウンターや協同学習を特別活動や授業場面に導入する等、友人づくりの機会を提供することも重要な働きかけと言えるだろう。

今後の課題として、まず、「中1ギャップ」尺度の精練・妥当性の検討がある。また、因果関係をより正確に検討するために、共分散構造分析等の手法を用いて、本データを再分析してみることも必要だろう。最後に、「中1ギャップ」尺度の機能として最も重要なのは、中学生活における適応への予測力を有することである。今後、縦断的にデータを収集・分析し、「中1ギャップ」の様相の時間的変遷、及び中学1年生の学校適応感の変化との関連性について更なる検討を行っていくことを課題としたい。

【引用文献】

- 古市裕一 小・中学生の学校生活享受感情とその規定要因. 岡山大学教育学部研究集録, 126, 29-34, 2004
- 北海道教育庁学校教育局学校安全・健康課（生徒指導グループ） Ladder 中1ギャップ解消のために. 北海道教育庁, 2010
- 石川晋・石川拓・高橋正一 中1ギャップー中学校生活になじむ指導のポイント. 学事出版, 2009
- 児島邦宏・佐野金吾 中1ギャップ克服プログラム. 明治図書出版, 2006
- 毛利猛 小中連携による「中1ギャップ」解消に向けた取り組みに関する総合的研究. 研究成果報告書, 2009
- 文部科学省 「平成21年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」（小中不登校・8月速報値）. 文部科学省, 2010
- 野澤亜伊子 生活時間の実態と意識にみる「中1ギャップ」（放課後の生活時間調査報告書ー小・中・高校生を対象に）. 研究所報告（ベネッセコーポレーション）, 55, 35-44, 2008
- 大久保智生 青年の学校への適応感とその規定要因ー青年用適応感尺度の作成と学校別の検討. 教育心理学研究, 53, 307-319, 2005
- 富家美那子・宮前淳子 教師の視点から見た中1ギャップに関する研究. 香川大学教育実践研究, 18, 89-101, 2009